

PROGRAM

エアスコープⅢ
(マリンバとティンパニー)
松下 功
<日本初演>
竹林 安倍圭子
ウッドゥンミュージック
(2台のマリンバ) R・オミューラー
バズル
(マリンバとテープ) ジェラルド・ジェ
道 安倍圭子

ファ・ファ・ファゴネ ジュラル・ネルソン
マリンバ・スピリチュアル 三木 稔
(マリンバとパーカッション) <日本初演>
ラグタイムより 安倍圭子編曲
トリプレッツ ジョージ・ハミルトン・グリーン
ジ・エンターテイナー スコット・ジョブリン
メープルリーフ・ラグ //

四季のコンサート 夏

1987年7月27日(水) 7:00 PM
浜松市民会館ホール
主催:浜松音楽友の会

●秋のコンサート 10月9日(金) PM 6:30
岡田博美ピアノ・リサイタル
●冬のコンサート 12月8日(火) PM 6:30
佐藤陽子ヴァイオリン・リサイタル
安倍圭子の評価は単なる Virtuoso (技術家)にとどまらず、Marimba Artist (マリンバの芸術家)として世界に位置づけられ、演奏活動に引っぱりだこ、という現状である。

権むことなく続けてきた作品開発の成果も国際的に高く評価され、彼女の委嘱活動によって生まれたオリジナル作品を学ぶ学生は全世界に及んでいる。

安倍圭子は日本を代表する国際的マリンバ演奏家である。毎年ヨーロッパ、アメリカ、日本を往復する多忙な演奏活動は、ソロリサイタル、コンツェルトのリスト、室内楽と幅広く、広汎なレパートリーを持つ。また、音楽のジャンルに制限されることなく独自の音楽を創造していくという大変ユニークな即興演奏方法は世界一流ミュージシャンとの共演も多く非常に高い評価と人気を得ている。

打楽器の中のマリンバの一楽器にすぎなかったマリンバを独奏楽器として確立させた功績により過去5回芸術祭優秀賞、奨励賞を受賞している。また、マリンバのために

安倍圭子 (マリンバ)

ピアノ・リサイタル



安倍圭子
マリンバ・リサイタル

共演

ミハエル・ド・ロー
ハンス・ゾンドロフ
ローナルド・アンツ

プロフィール

ミハエル・ド・ロー

オランダ・ハーグ生まれ。ハーグロイヤル音楽学校卒業。スティーブ・ライヒ等と共にアンサンブル作品やオペラの初演、室内楽で活躍するかわら、自ら作曲や指揮も手がけ、テレビ番組の音楽担当などもしている。オランダバレエオーケストラで10年間ティンパニーのソリストを務めた後はオランダの室内楽に積極的に参加するようになり、現在、サークルアンサンブルを創立、運営にたずさわっている。また、ソリストとして活動する一方ヨーロッパをはじめ海外での演奏活動も幅広く、オランダ、ベルリン、イギリス等のフェスティバル出演も多い。サークルアンサンブルを率いて東京サマーフェスティバルにも出演。日本のグループ「鼓童」との共演は打楽器の新しい道を開いた。

レコードとして、フィリップスレーベルでバルトークの「2台のピアノと打楽器の為のソナタ」をマルタ・アルゲリッチと吹き込んでいる。

ハンス・ゾンドロフ

オランダ・リーデン生まれ。幼少の頃よりショパンで打楽器の演奏をしていた彼は13才の時に地元の音楽学校でティンパニー、小太鼓、ビブラフォンの勉強を始めた。高校卒業後ユトリヒ音楽学校に入り、ミハエル・ド・ロー氏、ゴールド・スタン氏、安倍圭子氏の教えを受け、博士号を取っている。

在学中から、サークルアンサンブル、ラジオウィンドアンサンブル、オランダナショナルユースオーケストラ、オランダバレエオーケストラ、オランダフィルハーモニック等で活躍するかわら、ソリストとして、また、室内楽奏者としても高い評価を得ている。

ローナルド・アンツ

若くしてドラムバンドやブラスバンドでパーカッションを演奏していた。ロンドンのロイヤルアルバートホールで毎年10月に開かれる英国ブラスバンドの祭典でもドラムソロを担当している。15才の時、オランダのテレビ局の招きにより、13ヶ国でドラムソロコンサートを行った。高校卒業後、ユトリヒ音楽大学でミハエル・ド・ロー氏、安倍圭子氏に学び、地方の音楽学校で教鞭をとりながら2年間、オランダナショナルユースオーケストラに参加。アムステルダム・サークルアンサンブルのメンバーでもあり、1984年の鼓童との共演をはじめ多くのコンサートに出演。ソリストとして、また、アンサンブル奏者として大きな期待を寄せられている打楽器奏者である。

エアスコープ III

1984年11月 パリのボンビドーセンターで開かれたパーカッションフェスティバルにおいて安倍圭子さんの委嘱で作曲したテューブとマリimbaのための「AIRSCOPE III」が初演された。この作品は、その題名が示すごとく空気、風、調べの広がり、あるいは範囲を意味しているが、ここではそれに加え演奏者の呼吸を意識し、即興的要素を多く取り入れた。即興性を作品に取り入れることについて、私は作者と奏者の信頼感そして2者の呼吸が一緒となって始めてなりたつものであると思う。安倍さんは私の世界を十分に理解し、まさに作者と息のあった演奏であった。「AIRSCOPE III」に続くマリimbaとティンパニーのための「AIRSCOPE III」は安倍さんの演奏と共に演奏の視覚的要素をもっと意識した作品である。2人の奏者の音と動きのリフレクション（演奏行為のすべての要素を含んだ）により、無機質の「AIR」（息）を有機的な作品に構成しようと考えた。

竹林

早朝の竹の林の静寂の中に身をおいた時、そこには風の歌と、竹の葉が重なりあって生じる美しい音がかった。中間部に於いて、マレットの柄を音板にあてる事により、それに近いひびきを楽しんでみた。低音の音群にささえられて、スティッキング（手順）を生かしたメロディーが断片的によりはっきり浮き上がるように考えた。（安倍圭子）

ウッドゥン・ミュージック

メロディックな序奏の後、リズムミッドなパターンが第二奏者により奏され、その上にマリimbaの倍音を生かしたハーモニーが第一奏者により展開される。

序奏部のメロディーがリズムを変え、拡大され、自然にマリimbaの持つ木質のひびきの中に集約されていく。第一、第二奏者のリズムパターンを少しずつ変えていく事により微妙な音色の変化と独特な美しいひびきが生み出されていく。

バズル

1975年安倍圭子の為に作曲された「バズル」は「一人、または複数の器楽奏者のための遊びの提案」と副題されている通り、かなり演奏の任意性が前提となる作品で、作曲プロセスにおいてスケッチと云えるような断片的記譜を奏者の選択により連結したり、配合したりしてイメージネーションで曲を完成させなければならない。

音高と音価が規定され、音強も部分的に指示されているが、テンポ持続、密度、ダイナミックス等はきわめて自由で、今回は安倍が一人の演奏者のバリエーションをテューブ録音し、さらにそれに会場演奏を重ねる、という方法をとっている。

道

タイトルの「道」の意味は、人それぞれに与えられている、各自のあゆむべき異なった道の事でそれは東洋思想に於ける宇宙の「真理」に通じる意味の道である。

序奏部分は即興から入り、自然にメロディックな第一主題へと移行していく。トレモロを使わずにメロディーがレガートに浮き上がって聴こえるようなマリimbaの奏法を駆使し、また、マリimbaの豊かな響きを保てるよう低音の持続音を配慮した。（安倍圭子）

ファ・ファ・ファゴネ

1983年、安倍圭子のためにイギリスの作曲家ネルソンが作曲したものである。

足首にインド鈴、手首にカシンをつけ、足、手のリズムが音符に定着させてあり、マリimbaの音楽を作る上で重要な要素となっている。

マリimbaの為に作品としてはシアターピースに属する作品で、複雑なリズムから生ずる身体の動き自体が舞踏を感じさせる。

ファ、ファ、ドレミのテーマがリズムパターン、音群パターンの変化にともない現代風なエネルギーとなって凝縮されていく。

1984年秋のアメリカツアー、パリのボンビドーセンターに於ける安倍の世界初演により大好評を得た作品である。

マリンバ・スピリチュアル

私が「マリンバの時」と「マリンバ協奏曲」をつづけて書いた60年代の終わり頃は、まさにマリンバの黎明期でした。それが、安倍さんの燃えるような情熱に導かれて、アメリカ、そしてヨーロッパに広がり、私など他の仕事で行く機会にも、欧米の奏者たちがコーチや楽譜にサインをせがまれるのに驚いています。二作とも海外での上演頻度の方が日本よりもはるかに多いなんて、作曲当時想像もしていませんでした。

その後、邦楽器としてオペラの仕事が激しくて第三作が延び延びになり「マリンバ・スピリチュアル」が作曲できたのは、〈協奏曲〉のあと実に15年を経た1984年でした。同年3月18日、アムステルダム・コンセルトヘボウ・ホールにて安倍さんとNSA（アムステルダム打楽器合奏団）によって世界初演されると、直ちに欧米を火の如く駆け廻り、この3年の間に安倍さんが協演したいくつもの打楽器グループの中から、サークル・アンサンブルという素敵な合奏団の来日に合わせて、遂に日本初演が聞かれます。後半は〈巨火〉という曲でも採用した秩父屋台囃子で違った形で現れますが、そのマリンバとの協演の道行を今からわくわくしながら待っているところです。

それにつけても安倍さんのマリンバへの献身と外国の誰もが世界一と尊敬する並優れた力量が、国内でもっと評価され、安定した演奏生活が保証されないものでしょうか。

ラグタイムより

ラグタイムとは初期のジャズの総称であり、すなわち1915年以前のジャズとよばれる以前のジャズのことであり。この時代を代表する作曲家にスコット・ジョプリンがいる。

今回はこの時代から安倍圭子が三曲を選び四人のマレットプレイヤーのために編曲している。一曲目の作曲家、ハミルトン・グリーンは1930年代のアメリカを代表する木琴奏者で、多くの木琴の為に作品及びエチュードを残している。この時代のリズムをたくみに木琴に生かし、軽快かつ美しい木琴の作品として作曲されている。多くの奏者から愛されているこの曲は、ことにカナダの打楽器グループ「ネクスス」の重要なレパートリーの一つでもある。三連音符が効果的な木琴の世界をつくっている。

二曲目の「ジ・エンターティナー」及び三曲目の「メーブルリーフ」は、スコット・ジョプリンの代表作としてなじみが深い。今回は「ジ・エンターティナー」から有名なテーマの部分のみを使用しており、「メーブルリーフ」はドラムセットを加え、初期のジャズスタイルのなごりを残して編曲されている。

松下 功

安倍圭子

R・オミューラー

ジェラルド・ジュ

安倍圭子

ジェラルド・ネルソン

三木 稔

安倍圭子 編曲